

「新精選古典文法 三訂版」内容解説資料

この資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。

東京書籍「新精選古典文法 三訂版」―「新編言語文化」関連表

※「新精選古典文法 三訂版」の例文(練習問題を含む)のうち、「新編言語文化 002-901」から採録した例文の一覧。教科書の単元順に、「新精選古典文法 三訂版」と、教科書での掲載箇所をそれぞれ示した。



1 古文入門 古文の世界へ

古文に親しむ

[竹取物語]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|---|---------|
| P6 | 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。 | P124L7 |
| P83 | 野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。 | P124L7 |
| P86 | 名をば、さぬきのみやつことなむいひける。 | P124L8 |
| P90 | もと光る竹なむ一筋ありける。 | P124L9 |
| P93 | 名をば、さぬきのみやつことなむいひける。 | P124L8 |
| P96 | 三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。 | P124L10 |
| P114 | 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。 | P124L7 |
| P109 | 寄りて見るに、筒の中光りたり。 | P124L10 |

[枕草子]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|---|--------|
| P70 | 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。 | P125L1 |
| P156 | 雨など降るもをかし。 | P125L5 |

[源氏物語]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|--------------------------------|--------|
| P72 | いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。 | P125L6 |
| P129 | いつれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、 | P125L6 |
| P135 | いつれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、 | P125L6 |
| P160 | いつれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、 | P125L6 |
| P162 | いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。 | P125L6 |

[方丈記]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|----------------------------|--------|
| P19 | 世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。 | P126L3 |
| P76 | 世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。 | P126L3 |
| P83 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P126L1 |
| P110 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P126L1 |
| P136 | 世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。 | P126L3 |
| P146 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P126L1 |
| P164 | ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。 | P126L1 |

[平家物語]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|-----|---------------------------|--------|
| P65 | おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。 | P126L6 |
| P75 | 猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。 | P126L7 |

[奥の細道]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|---------------------------|--------|
| P62 | 月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。 | P127L4 |
| P93 | 月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。 | P127L4 |
| P167 | 月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。 | P127L4 |

児のそら寝

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|----------------------------|--------|
| P41 | 今は昔、比叡の山に児ありけり。 | P128L1 |
| P43 | し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、 | P128L3 |
| P75 | ただ食ひに食ふ音のしければ、 | P129L5 |
| P78 | 寝たるよしにて、いでくるを待ちけるに、 | P128L4 |
| P101 | いま一度起こせかしと思ひ寝に聞けば、 | P129L4 |
| P108 | この児、さだめておどろかさむずらむと待ちみたるに、 | P128L6 |
| P108 | 「や、な起こし奉りそ。」 | P129L2 |
| P113 | 無期ののちに、「えい。」といらへたりければ、 | P129L6 |
| P121 | 「をさなき人は寝入り給ひにけり。」 | P129L3 |
| P134 | 「をさなき人は寝入り給ひにけり。」 | P129L3 |
| P137 | 「いざ、かいもちひせむ。」 | P128L2 |
| P137 | 僧たちわらふことかぎりなし。 | P129L7 |
| P148 | 待ちて寝ざらむを、 | P128L3 |
| P163 | 「や、な起こし奉りそ。」 | P129L2 |
| P166 | 「や、な起こし奉りそ。」 | P129L2 |

検非違使忠明

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|-------------------|--------|
| P127 | 「観音、助け給へ。」と申しければ、 | P133L2 |

絵仏師良秀

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|----------------------------------|--------|
| P113 | 「あはれ、しつるせうとくかな。年ごろはわろく書きけるものかな。」 | P139L3 |
| P148 | 「かうこそ燃えけれと、心得つるなり。」 | P139L8 |

2 随筆 日々の思い

徒然草

[亀山殿の御池に]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|-------------------------|--------|
| P73 | 亀山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、 | P146L1 |
| P121 | 多くの銭を賜ひて、数日に営み出だして、 | P146L2 |
| P155 | つひに回らで、いたづらに立てりけり。 | P146L4 |

[奥山に、猫またといふものありて]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|-----|------------------------------|--------|
| P73 | 飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。 | P149L3 |
| P91 | 飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。 | P149L3 |

[今日はそのことをなさんと思へど]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|------------------------------|--------|
| P96 | 頼みたる方のことは違ひて、思ひ寄らぬ道ばかりはかなひぬ。 | P152L2 |
| P106 | かねてのあらまし、みな違ひゆくかと思ふに、 | P152L7 |
| P106 | 一年のうちもかくのごとし。一生の間もまたしかなり。 | P152L5 |
| P164 | 一年のうちもかくのごとし。一生の間もまたしかなり。 | P152L5 |

枕草子

[うつくしきもの]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|--|--------|
| P46 | 大きにはあらぬ殿上童の、装束きたてられて歩くも、うつくし。 | P154L7 |
| P73 | また、短きが袖がちなる着て歩くも、みなうつくし。 | P155L4 |
| P93 | 何も何も、小さきものは、みなうつくし。 | P155L2 |
| P138 | 雀の子の、ねず鳴きするに踊り来る。 | P154L1 |
| P147 | をかしげなる児の、あからさまに抱きて、遊ばしうつくしむほどに、かいつきて寝たる、 | P154L7 |
| P168 | 声は幼げにて文読みたる、いとうつくし。 | P155L5 |

[五月ばかりなどに山里に歩く]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|----------------------|--------|
| P146 | 五月ばかりなどに山里に歩く、いとをかし。 | P156L1 |

3 詩歌 うたの心

折々のうた

[古今和歌集]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|-----|------------------------------|--------|
| P14 | 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる | P167L2 |
| P24 | 五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする | P166L2 |
| P87 | 五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする | P166L2 |

[新古今和歌集]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|---------------------------|--------|
| P144 | 志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月 | P169L2 |

古文学習のしるべ5 和歌

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|-------------------------------|---------------|
| P140 | 山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば | P174 下 L4 |
| P142 | あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む | P174 上 L5 |
| P144 | 志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月 | P174 下 L16 |
| P145 | 高砂の尾の上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ | P173 上 L8 |

4 物語 古人の生き方

伊勢物語

[芥川]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|--|--------|
| P19 | 昔、男ありけり。 | P178L1 |
| P40 | 見れば、率て来し女もなし。 | P179L6 |
| P56 | 白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを | P179L9 |
| P59 | 女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。 | P178L1 |
| P76 | 「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。 | P178L5 |
| P80 | やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。 | P179L6 |
| P94 | 神さへいとみじう鳴り、 | P178L8 |
| P99 | はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、 | P179L2 |
| P107 | 昔、男ありけり。 | P178L1 |

| | | |
|------|---------------------------|--------|
| P147 | やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。 | P179L6 |
| P155 | 「かれは何ぞ。」となむ男に問ひ()。 | P178L5 |
| P155 | 足ずりをして泣けどもかひなし。 | P179L7 |
| P167 | はや夜も明けなむと思ひつつみたりけるに、 | P179L2 |

[筒井筒]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|---|-----------|
| P17 | 男はこの女をこそ得めと思ふ。 | P180L5 |
| P52 | 風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ | P182L2 |
| P81 | 君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも | P182L10 |
| P85 | 君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る | P183L1 |
| P90 | この女をこそ得め | P180L5 |
| P93 | 男も女も恥ぢかはしてありけれど、 | P180L3 |
| P100 | 筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに | P180L10 |
| P102 | 風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ | P182L2 |
| P142 | 風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ | P182L2 |
| P147 | 前裁の中に隠れみて、河内へ()顔にて見れば、 | P181L6 |
| P148 | 男も女も恥ぢかはしてありけれど、 | P180L3 |
| P148 | 悪しと思へる気色もなくて、 | P181L4 |
| P152 | 昔、田舎わたらひし()人の子ども、井のもとに出でて遊び()を、大人になり()ば、男も女も恥ぢかはしてあり()ど、男はこの女をこそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなむあり()。さて、この隣の男のもとより、かくなむ。 | P180L1～L9 |
| P156 | 君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも | P182L10 |

◎言語活動 和歌を自分の言葉で書き換える

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|-----|--------------------------------|--------|
| P64 | 老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな | P184L4 |

平家物語

[木曾の最期]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|--|---------|
| P9 | よつびいてひやうふつと射る。 | P191L12 |
| P43 | 「日ごろは音にも聞きつらん、今は目にも見給へ。」 | P190L11 |
| P81 | 「弓矢取りは、年ごろ日ごろいかなる高名候へども、最期の時不覚しつれば、長き疵にて候ふなり。」 | P189L4 |
| P81 | 中に取り込め、雨の降るやうに射けれども、鎧よければ裏かかず、あき間を射ねば手も負はず。 | P191L5 |
| P123 | 「さる者ありとは、鎌倉殿までも知ろし召されたるらんど。」 | P190L12 |

| | | |
|------|---------------------------|---------|
| P128 | 「しばらく防き矢つかまつらん。」 | P188L8 |
| P130 | 「御身もいまだ疲れさせ給はず。御馬も弱り候はず。」 | P188L5 |
| P149 | 所々で討たれんよりも、 | P188L14 |
| P163 | 鎧よければ裏かかず、 | P191L5 |

5 紀行 旅の心

奥の細道

[旅立ち]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|--------------|--------|
| P147 | あけぼのの空朧々として、 | P198L1 |

[平泉]

| 文法書 | 例文 | 教科書 |
|------|--|--------|
| P78 | 衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。 | P200L2 |
| P104 | 三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。 | P199L1 |